

……ハイ、大丈夫です。落ち着きました、ありがとうございます。
います。

雨の音すごいですね、ザーザー……夕立って怖いなあ、空の底が抜けて落ちてきそうな気がしませんか？ 世界が終わる日みたい。

でも窓越しに聞く雨音は嫌いじゃありません、守られてる感じがして。わかります、安全圏にいる感覚？ 自分だけは大丈夫だろうって、根拠のない全能感。

あ、そうですね。わかってます、ちゃんと話さなきゃ……大丈夫、深呼吸したら落ち着きます。刑事さんたちもわけわかんないですよ、顔に書いてあります、一体この子に何が起きたんだって。今から説明します、支離滅裂になっちゃったらごめんなさい。

アレ、見てください。道路が洪水みたい。真ん中にあるの見えます？ マンホールです。まん丸い鉄の蓋。町中にありますよね。マンホールがない町ってあるんでしょうか、私は知りません。電線と同じ、そこにあるのが当たり前のものです。

なのに見えない。

あまりに当たり前すぎて、皆が見落としてる日常の異物。

子供ってへんなもの好みますよね、ボールとか三角コーンとか駐車場の縁石とか。私のお気に入りはマンホールでした。

一番最初の記憶は4・5歳頃かな、マンホールにのっかっているんです。ピコピコ鳴る子供用のサンダルはいてました、大好きなウサギのキラクターがプリントされた真っ赤な……笛付きサンダルっていうんですか、アレ。物知りですね。お子さんいるんですか？ ああ、娘さんまだ幼稚園なんですね。可愛いだろうなあ。

……すいません、脱線しました。その頃の私のブームは、笛付きサンダルを履いてマンホールを踏むことだったんですよ。ピコピコピコピコ、音が鳴るのが楽しくて30分やつても飽きなかった。なんでマンホールの上かって？ そうですね……小学校の行き帰りにしませんでした、横断歩道の白線を安全圏に見立てる遊び。間は地獄なんです、底がないんです。落ちたら即死。そういう遊びだったんじゃないかな、よく覚えてないけど。

もうご存じでしょうけどうちは放任主義だったんです。私

が表で遊んでも何も言わない。遠くへ行つちやだめだとか早く帰つてこいとか、よそのお母さんみたいなことは全然言わないんです。だから私は家を離れてマンホールを辿りました。

うちの前にあるマンホールを出発点にして、町中のマンホールを数えたんですよ。何個か忘れちゃったけど。ひい、ふう、みい……踏んでジャンプ、またジャンプ。そうやって一人で遊んでたら行く手のマンホールから視線を感じたんです。なんだろうって不思議に思つて、よく見たら蓋がほんのちよつと開いてるんです。誰かが下から持ち上げて、目だけ覗いてたんです。顔は蓋の陰になつて、年齢はもとより性別すら判然としません。

私はきよんとしました。

「だれ？」

するとマンホールはすぐ落ちて人影は引つ込んでしまいました。大急ぎで追いかけて、足元のマンホールに繰り返し呼びかけたけど反応はありません。

「おーい」

諦めきれずにノックをした次の瞬間、マンホールが数センチ浮き上がり、片足のサンダルがすっぽぬけました。

「あつ」

サンダルはマンホールの隙間の暗闇に落ちていき、ぼちゃんと水音がしました。

お気に入りのサンダルをなくしてしまつたのがすごく哀しくて、泣きながら帰りました。

次の日、幼稚園の先生に話したんです。

「あのねセンセイ、昨日マンホールにだれかいたよ」

先生は……馬鹿にしたりしませんでしたよ、優しい人だったから。女の刑事さんと似てたな、子供ができてやめちゃったけど。嘘だなんて否定せずたどたどしい私の訴えにニコニコ耳を傾けて、こう言ってくれました。

「それはマンホールに住んでる人ね」

「なんでマンホールに住んでるの？」

「お日様の光が苦手なかもね。暗い所が好きだからかく

れんぼしてるのよ」

ふーん、と思いました。

マンホールに人が住んでるんだ、知らなかった。おうちがないなんて可哀想……じゃない、下水道がおうちなの？マンホールは玄関ドアと一緒に、開ける前にノックをしなきゃだめなのかもしれない。

黒いクレヨン一色でマンホールに住んでる人を描いたら、先生は上手ねって褒めてくれました。嬉しかった。

他の子にも教えてあげましたよ、マンホールに住んでる人のこと。信じてくれる子は少なかった。お迎えに来たお母さんたちもちよつと気味悪そうにしてたっけ。本当にいるのに。見たのに。

小学校が上がって数か月後、夕立が降る帰り道。

黄色い傘をさしてひとりぼっちで下校してたら、またゴトんと音がしました。マンホールに住んでる人でした。

「濡れない？」

マンホールの人は私が一人にいる時しか出てきてくれません。クラスで話したらウソツキ呼ばわりされました。マンホールの人のせいで友達ができないんだ、と逆恨みしたこともあります。

でもあの時は……すごい雨で。マンホールの下で濁流が渦巻く轟音が響いて、思わず聞いていました。マンホールの人は雨の日も下水道で暮らしているのだろうか、地上に避難しないのだろうか、不思議でした。今ならお日様もでないのに。

マンホールの人はほんの数センチ鉄蓋を上げ、じつとこつちを見ていました。何故か瞬きはしません。一回もしません。よく目が乾かないな、と感心しました。質問を無視されたのは傷付きましたが、子供らしい好奇心がもたげ、ポケットに入れたスーパーパーボールを取り出しました。蛍光色の緑のボールです。

片手に傘を持ったままその場にしゃがみ、水浸しの地面にボールを転がしました。するとボールはコロコロとあっけなく転がって、狙い定めた通りにマンホールの隙間に落ち込みました。

マンホールの人は驚いたのでしょうか、咄嗟に蓋が落ちました。私は驚かせてしまったのを反省し、マンホールに近付きました。落ちて怪我してないか心配になったのです。

「だいじょうぶ？」

蓋の表面を手の甲で叩いておずおず問えば、再び蓋に隙間が生じ、スーパーボールが投げ返されました。

マンホールの人とキャッチボールが成立し、ちよつぱり愉快になりました。

その後スーパーボールを転がしては投げ返され、転がしては投げ返されを繰り返すうちに心は愉快に弾みました。遊び相手ができて嬉しかったのです、学校で構ってくれる子はいませんでしたから。

何時間たった頃でしょうか、すっかり遊びに夢中で遅くなりました。最後に一回と心に決め、少し強めにボールを転がせば、それがマンホールの人額の当たりました。

まずいと悔やみました。直後に蓋が落下し、マンホールの人がぐぐもった悲鳴を上げました。

「ごめん、痛かった？」

傘を首と肩に挟んだまま蓋を回そうとした時……マンホールが薄く開き、片手を鷲掴みにされました。爬虫類の鱗に覆われた手でした。一番似てるのはワニです。